

【2】『十二遊経』の仏伝記事

〔1〕釈迦族の起源

『十二遊経』には成道後12年間の釈尊の事績を年代順に記述する前の部分に、釈迦族の起源や菩薩の兜率天における世間観察、白象の宝車に乗っての下生、菩薩の家族（両親、親戚、妃）についての言及がある。われわれの研究の主たる目的から言えば、成道後12年間の釈尊の事績が重要であるが、『十二遊経』の伝承の特徴を探るためにはそれらの記述についてもその特徴を明らかにする必要がある。

〔1-1〕『十二遊経』の冒頭に記された釈迦族の起源にまつわる伝説は概略を示せば以下のようなものである⁽¹⁾。

阿僧祇劫の昔、国王だった菩薩が父母を早くに亡くし、国を弟に譲って出家する。菩薩は瞿曇（ゴータマ）姓の婆羅門に従って道を学び、自らも姓を「瞿曇」に改め、深山に入って修行する。菩薩が師の教えに従って乞食しつつ国界に還るが、人々は国王であった菩薩を識別せず、彼を「小瞿曇」と呼ぶようになる。小瞿曇（菩薩）が城外の甘果園中に精舎を作って独り坐っていると官物を奪って逃走した500人の大賊が小瞿曇の近辺に至り、そこに奪ったものを遺して散る。捕吏が賊を追って小瞿曇のもとに至り、小瞿曇に嫌疑をかけて捕らえた上で国王に上問する。国王に死刑を宣告されて小瞿曇は串刺しの刑に処され、流れ出た血が地に落ちる。師である大瞿曇は天眼をもってこれを察知して神足をもって瀕死の小瞿曇のもとに至り、目の前で左右から箭を射られて死んだ小瞿曇の最期を看取った。大瞿曇は小瞿曇の遺体を棺に収めて、小瞿曇から流れ出た土中の余血をとって泥土で固めて山中に持ち帰り、小瞿曇の左面から出た血を左器に、右面の血を右器に入れる。10カ月の後に左器から男が、右器から女が生まれて「瞿曇」を姓とし、別名を「舎夷仁」と呼ばれるようになる。舎夷仁以降の王統は、宝如来釈迦越⁽²⁾——25王——文陀竭王・頂生王遮迦越（cakravartin）——頂生王の左髀・右髀（から生まれた2人の）王——歡喜王——諸王——惡念遮迦越——堅念王——喜殺王——師子念王——師子意王以下84王——師子命車王（白浄王、菩薩の父）⁽³⁾とつづく。

(1) 『十二遊経』（大正04 p.146上～）

(2) 『十二遊経』（大正04 p.146中）「却後十月。左即成男。右即成女。於是便姓瞿曇氏。一名舎夷仁。賢劫来始為宝如来釈迦越寿五百万歳」。舎夷仁と宝如来釈迦越との関係が不明である。以下に見る『根本有部律破僧事』などの伝承において吉枳（Kṛki）王の代に迦葉如来が世に出ることと関連があるとすれば「宝如来」と「釈迦越」は別人格か。

(3) 『十二遊経』（大正04 p.146中）「於是後有師子命車王名白浄。是菩薩父」。師子車王に「白浄」という別名があつてそれが菩薩の父であつたように読める。『長阿含経』『世記経』（大正01 p.149中）、『大楼炭経』（大正01 p.309上）、『起世経』（大正01 p.364上）、『起世因本経』（大正01 p.419中）、『四分律』（大正22 p.779中）、『根本有部律破僧事』（大正24 p.105上）とその梵本（*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Being the 17th and Last Section of the Vinaya of the Mūla-sarvāstivādin*, ed. by Raniero Gnoli, Roma, 1977, Part I, p.031）、*Mahāvastu* (ed. by É. Senart vol. I p.352)、『仏本行集経』（大正03 p.675下）、『衆許摩訶帝経』（大正03 p.937下）の伝承では菩薩の祖父の名は「師子頰」（Simhahanu）であり（『大楼炭経』は「師子」とのみ）、そのうち『根本有部律破僧事』とその梵本、『起世経』、

『起世因本経』、『衆許摩訶帝経』で師子類の兄弟として「師子吼」(Simhanādin)または「師子足」の名が挙がるが「師子」のつく名はこの2つである。詳細は『モノグラフ』第3号「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」pp.017~024参照。

[1-2] 釈迦族の起源については種々の資料があるが⁽¹⁾、マハーサンマタ(Mahāsammata)王を世界最初の王とし、そこから諸王を経て日種族の祖であるイクシュヴァーク(Skt. ; Ikṣvāku, Pāli ; Okkāka, 漢 ; 甘蔗)王が出現して、そこから釈迦族が生じたというのがおおよそ共通する伝承である。

『十二遊経』の舎夷仁誕生の伝承は、『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』、『仏本行集経』に説かれるイクシュヴァーク王の誕生を物語る伝説⁽²⁾に近似しているため、舎夷仁はイクシュヴァーク王に対応すると考えられる。しかし『十二遊経』はマハーサンマタに遡る王統を欠き、また文陀竭(頂生)王(Skt. ; Māndhātṛ, Pāli ; Mandhātara)のようなイクシュヴァーク王以前の王が舎夷仁以降に置き換えられ、舎夷仁から白浄王(浄飯)に至る王統については独特のものになっている。

『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』の伝承はほぼ共通しているので今は『根本有部律破僧事』に基づいて概要を紹介する。固有名詞については()内に梵本ものを挙げる。

吉枳(Kṛki)王の時に迦葉如来が世に出た。この時釈迦牟尼菩薩は迦葉仏のもとで菩提心を起こして兜率天に生まれる。吉枳王の息子の善生(Sujāta)王は補多羅(Potalaka)城にあり、子孫相承して101代の最後の王が耳生(Karṇa)王⁽³⁾であった。耳生王に喬答摩(Gautama)と波羅墮闍(Bharadvāja)の2人の王子があり、喬答摩は出家して波羅墮闍が国王になる。喬答摩は黒色(Kṛṣṇadvaiṇāyana)仙に師事する。喬答摩が病にかかって師の許しを得てから聚落に入って乞食し、補多羅城の閑林に草舎を作って住む。そのころ招賢(Bhadrā)という名の遊女があつて蜜捺羅(Mṛṇāla)という不善人が彼女に諸々の装身具などを贈る。しかし招賢は他の客から金銭を受け取って蜜捺羅を後回しにする。蜜捺羅は怒って刃物で彼女を殺し、血のついた刃物を喬答摩の草舎の前に捨てる。喬答摩は遊女を殺した咎を着せられて串刺しの刑になる。黒色仙が喬答摩のもとに来て「苦しくないか」と尋ねると、喬答摩は「身体は傷ついても心は損なわれていない」と言って、それを「私の言葉が真実であるなら師が金色になる」との真実語によって証して、黒色仙は変金色仙(Suvarṇadvaiṇāyana)になる。変金色仙が「子なくして死ぬと善道を得ない」と説くと、喬答摩は過去世の淫欲事を思い出して両腿から精血を出だし、それは業力によって2つの卵になる。その卵は日光の暖を得て成熟し、そこから2人の子供が生まれる。変金色仙はその2人の子を甘蔗園(ikṣuvāṭa)中に見出して、「日種」(sūryagotra)、「喬答摩」(Gautama)、「身生」(Āṅgīrasa)、「甘蔗種」(Ikṣvāka)の4号を与える。波羅墮闍王は子なくして死に、諸大臣が話し合つて喬答摩の子を求め、変金色仙のところで2人の子を得て長子を王に立てる。しかしその王はまもなく子なくして死に、弟を「甘蔗王」(Ikṣvākurāja)と号して王に立てる。それから101代の甘蔗王を経た最後の王が「増長」(Virūdhaka)という名の甘蔗軍将王(Ikṣvākurāja)⁽⁴⁾であり、増長の王子4人が劫比羅仙人住処に行つて釈迦族の祖先となる⁽⁵⁾。

(1) 『モノグラフ』第3号「仏伝諸経典および仏伝関係諸資料のエピソード別出典要覧」pp.017

～024 参照。

- (2) 『根本有部律破僧事』(大正 24 p.102 上)、*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Part I*, p.021、『衆許摩訶帝経』(大正 03 p.935 中)、『仏本行集経』(大正 03 p.674 上)
- (3) 大同意 (Mahāsaṃmata) から耳生王までの系譜は『モノグラフ』第 3 号 p.018 参照。
- (4) 梵本と『衆許摩訶帝経』には「軍将」に対応する原語がない。
- (5) 耳王の 2 人の息子に瞿曇と婆羅墮闍があり、瞿曇から甘蔗種が生まれたとするものに闍那崛多訳『起世経』「其最後王。名曰耳者。彼耳者王有二子。大名瞿曇。次名婆羅墮闍。彼瞿曇王有一子。名甘蔗種」(大正 01 p.364 上)と達摩笈多訳『起世因本経』「彼最後王。名耳。其耳王有二息。一名瞿曇。二名婆羅墮闍。彼王一息。名甘蔗種」(大正 01 p.419 上)とがある。しかしここには甘蔗王の誕生の因縁譚がない。

[1-3] 『仏本行集経』には甘蔗王の誕生が次のように記されている。

大茅草王⁽¹⁾が子なくして出家して王仙となる。老衰すると諸弟子が虫や獣が危害を加えないように王仙を樹の上にのせる。ある獵師が白鳥と誤って王仙を射る。王仙から 2 滴の血が地に墮ち、2 本の甘蔗が芽を出して 2 人の子が生まれる⁽²⁾。

(1) 大衆平章から大茅草王までの王統は『モノグラフ』第 3 号 pp.021～022

(2) 『仏本行集経』(大正 03 p.674 上)。*Mahāvastu* 中の対応する記事 (vol. I p.348) では誕生の因縁譚がない。

[1-4] 『十二遊経』の舍夷仁誕生の伝説は、『仏本行集経』の伝承よりも『根本有部律破僧事』の伝承に近い。しかし『根本有部律破僧事』も『仏本行集経』も漢訳年代は『十二遊経』よりも後代であるので⁽¹⁾、『十二遊経』の訳経者(撰述者?)がこれらの漢訳経典を参照したとは考えられない。このことから少なくとも『十二遊経』の全体が中国にすでに伝わっていた伝承に基づく中国撰述であるというような推測は否定されよう。しかしながらこのことだけでインドないしはその周辺地域に由来する原典を想定しなければならないわけではない。訳経者である迦留陀伽は「外国沙門」であるから、彼が知っていた伝承を用いて撰述した可能性は否定できないからである。

(1) 『仏本行集経』は闍那崛多によって A.D.587～591 または 592 年に、『根本有部律破僧事』は義浄によって A.D.700～711 年に訳された。

[2] 兜卒天での世間観察と下生

[2-1] 菩薩は兜卒天で 4 種ないし 5 種(時機、国土、地方、家系、母親)⁽¹⁾の観察をして生まれるべきところを決定する⁽²⁾。『十二遊経』は簡略に「菩薩、兜術天上に在りて、意に下生せんと欲して天上に於いて観ず。『誰の国に生ず可きか』。言わく、『唯、白浄王の家のみ、身を生ずべし』」⁽³⁾として、4 種ないし 5 種の観察の形をとらない。世間観察の形が定まる以前の形であろうか。

(1) 4 種に数えるものには家系の中に母親を含むものや『修行本起経』(大正 03 p.463 上)のように土地、父、母、国とするものがある。

(2) 『モノグラフ』第 3 号 pp.015～017

(3) 『十二遊経』(大正 04 p.146 中)

[2-2] 菩薩が下生する際に白象になる、または白象に乗るという伝承は種々の仏伝に記述があるが⁽¹⁾、『十二遊経』の伝承は独特のもので白象は「伊羅慢龍王 (Airāvāṇa)」と呼ばれ、それが牽く宝車に乗って菩薩が下生する。その白象は 33 頭を有し、1 頭につき 7

牙があり、1牙につき7池があり、1池につき7憂鉢蓮華（青蓮華）があり、1蓮華につき1玉女がいると描写される⁽²⁾。

「伊羅慢龍王（Skt. ; Airāvāṇa, Pāli ; Erāvāṇa）」は一般的には帝釈天の乗り物であつて、下生する菩薩の乗象の名とされるのはここよりほかには見出せない。

(1) 『モノグラフ』第3号 pp.027~030

(2) 『十二遊経』（大正04 p.146中）；伊羅慢龍王以為制乘名白象。其毛羽踰於白雪山之白。象有三十三頭。頭有七牙。一牙上有七池。池上有七憂鉢蓮華。一華上有一玉女。菩薩与八万四千天子。乘白象宝車来下。

この‘Airāvāṇa’象の描写に関して、特に以下の記述が『十二遊経』の記述と一致する。

『長阿含』030「世起経」（大正01 p.132上）；帝釈復念伊羅鉢龍王。伊羅鉢龍王。復自念言。今帝釈念我。龍王即自变身出三十三頭。一一頭有六牙。一一牙有七浴池。一一浴池有七大蓮華。一一蓮花有一百葉。一一花葉有七玉女。鼓樂絃歌。拊舞其上。

『大樓炭経』（大正01 p.293上）；諸天欲以白宝象戲。象名曰倪羅遠。象自化作三十二頭。頭有七牙。牙化作七浴池。浴池中各作七蓮華。蓮華枝有千葉。一葉上者。有一玉女舞。

『大樓炭経』（大正01 p.295中）；復念伊羅摩龍王。爾時伊羅摩龍王言。天帝釈已念我等。便化作三十六頭象。一一頭化作六牙。一一牙上化作七浴池。一一浴池中。化作七蓮華。一一蓮華上。化作七玉女作妓樂。

『起世経』（大正01 p.343上）；爾時即念伊羅婆那大龍象王。時伊羅婆那大龍象王。亦生是念。帝釈天王。心念於我。如是知己。從其宮出。即自化作三十三頭。其一一頭具有六牙。一一牙上化作七池。一一池中各有七花。一一花上各七玉女。一一玉女。各復自有七女為侍。

『起世因本経』（大正01 p.398上）；爾時心念伊羅婆那大龍象王。其伊羅婆那大龍象王亦生是念。帝釈天王心念於我。如是知己。從其宮出。即自變化。作三十三頭。其一一頭化作六牙。一一牙上。化作七池。一一池中。各有七華。一一華上。各七玉女。一一玉女。各復自有七女為侍。

『大方広仏華嚴経』（大正10 p.228下）；譬如伊羅鉢那象王……以神通力。種種變現。令其身有三十三頭。於一一頭。化作七牙。於一一牙。化作七池。一一池中。有七蓮華。一一華中。有七采女。一時俱奏百千天樂。

『等目菩薩所問三昧経』（大正10 p.590中）；譬如族姓子。悅樂龍王……爾時天帝。即乘悅樂龍王。天帝釈尋隨上此龍王。爾時悅樂龍王。於其時。為若干變。而種種行現有三十三頭。於一一頭。各各有七牙。於一一之牙。而有七浴池。於一一浴池而現七百蓮華。於一一蓮華。現有七百玉女。如其一玉女。而悉歎歌。

『菩薩瓔珞経』（大正16 p.008中）；譬如龍王伊羅鉢多羅。……化身七万由延三十二頭。一一頭者辺有七牙。一一牙上有宝浴池。一一池中生七百蓮華。一一蓮華七百玉女。共相娛樂作倡伎樂。彈琴鼓瑟音声不絶。

パーリ資料では *Dhammapada-aṭṭhakathā* (vol. I p.273) に同様の記述がある。so tettiṃsa janānaṃ tettiṃsa kumbhe māpesi, tettiṃsa kumbhānaṃ ekekasmim kumbhe satta satta dante māpeti, tesu ekeko paṇṇāsayojanāyāmo ekekasmim c’ettha dante satta satta pokkharāṇiyo honti, ekekāya pokkharāṇiyā satta satta padumagacchā, ekekasmim gacche satta satta pupphāni honti, ekekassa pupphassa satta satta pattāni, ekekasmim patte satta satta devadhītarō naccanti, 「彼（エーラーヴァナ）は33人のために33の面瘤を作る。……33の面瘤の1つ1つの面瘤に7本の牙を作り、1本1本が50ヨージャナの長さで、1本1本の牙に7つの蓮池があり、1つ1つの蓮池に7つの蓮の群生があり、1つ1つの蓮の群生に7つの華が咲き、1つ1つの華に7枚の花弁があり、1枚1枚の花弁の上に7人の天女が踊っている……」。

[3] 菩薩の家族

[3-1] 『十二遊経』には菩薩の両親、兄弟、叔父、従兄弟について以下のように記されている。

菩薩の父は白浄という名で、父は4人兄弟である。白浄王の長子は悉達 (Siddhārtha)、小子が難陀 (Nanda) である。菩薩の母は摩耶 (Māyā) で、難陀の母は瞿曇弥 (Gotamī) である。叔父の甘露浄王の長子は調達 (Devadatta) で、小子は阿難 (Ānanda) である。中叔の穀浄王の長子は釈摩納 (Mahānāman) で、小子は阿那律 (Aniruddha) である。小叔の設浄王の長子は釈迦王で、小子は釈少王である。

[3-2] 菩薩の父の名 ‘Śuddhodana’ は一般的に「浄飯」と訳されるが『十二遊経』では「白浄」という訳語が用いられている。この訳例は他に『長阿含経』、『中阿含経』、支謙訳『梵摩渝経』、『増一阿含経』、『六度集経』、『修行本起経』、『菩薩本行経』、『過去現在因果経』⁽¹⁾ などにある。また ‘Amṛtodana’ (甘露飯) を「甘露浄」と訳しているのは他に『修行本起経』⁽²⁾ に見える。

「白浄」が ‘Śuddhodana’ (浄飯) に、「甘露浄」が ‘Amṛtodana’ (甘露飯) に対応することは明白であるが、「穀浄」と「設浄」については訳語から対応する原語を推定するのは困難である。

菩薩の親戚関係については諸伝あるが⁽³⁾、『十二遊経』と同様に ‘Amṛtodana’ の息子を ‘Devadatta’ と ‘Ānanda’ にする伝承は『起世経』、『起世因本経』、『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』である⁽⁴⁾。

このうち『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』が ‘Śuklodana’ (白飯) の息子として ‘Tiṣya’ (恒星、娑帝疎嚕) と ‘Bhadraśākyarāja’ (賢善、婆捺哩賀) を、‘Droṇodana’ (斛飯) の息子として ‘Mahānāman’ (大名、摩賀曩麼) と ‘Aniruddha’ (阿那律、阿儂樓駄) を兄弟とするのに対して、『起世経』と『起世因本経』は白飯の息子として「帝沙」(Tiṣya) と「難提迦」(?) を、斛飯の息子として「阿泥婁駄」(Aniruddha) と「跋提梨迦」(Bhadraśākyarāja) を兄弟にしている。

『十二遊経』は穀浄の息子として ‘Mahānāman’ (釈摩納) と ‘Aniruddha’ (阿那律) を、設浄の息子として釈迦王と釈少王を兄弟とするので、‘Mahānāman’ と ‘Aniruddha’ を兄弟とする組み合わせに着目すれば、『十二遊経』は『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』にもっともよく対応し、『起世経』と『起世因本経』とは少し異なるとうべきである⁽⁵⁾。

よって釈摩納と阿那律の父とされる「穀浄」は ‘Droṇodana’ (斛飯) に対応し、「設浄」は ‘Śuklodana’ (白飯) に対応すると見なすことができる。「設浄」の息子の「釈迦王」と「釈少王」は ‘Tiṣya’ (恒星、娑帝疎嚕) と ‘Bhadraśākyarāja’ (賢善、婆捺哩賀) に対応するのであろう。どちらがどちらに対応するのかは明らかにしがたいが、『根本有部律』などの伝承⁽⁶⁾ で浄飯から王位を譲られる ‘Bhadraśākyarāja’ が「釈迦王」とされている可能性は大きい。

『十二遊経』と『根本有部律破僧事』などとの差異としては、浄飯以下の3兄弟の序列が異なる点が挙げられる。後者では浄飯、白飯、斛飯、甘露飯の順であるに対して、『十二遊

経』に従えば浄飯、甘露飯、斛飯、白飯の順になる。

- (1) 『長阿含経』(大正 01 p.149 中)、『中阿含経』(大正 01 p.470 下)、支謙訳『梵摩渝経』(大正 01 p.883 下)、『増壹阿含経』(大正 02 p.599 中)、『六度集経』(大正 03 p.005 上)、『修行本起経』(大正 03 p.461 上)、『菩薩本行経』(大正 03 p.120 下)、『過去現在因果経』(大正 03 p.623 中)。
- (2) 『修行本起経』(大正 03 p.461 上)「白淨王。無怒王。無怨王。甘露淨王。及迦維羅衛九億長者。……」
- (3) 『モノグラフ』第 3 号 pp.024~027 参照。
- (4) 『起世経』(大正 01 p.364 中)、『起世因本経』(大正 01 p.419 下)、『根本有部律破僧事』(大正 24 p.105 上)、*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Part I, p.031*、『衆許摩訶帝経』(大正 03 p.937 下)。ただしこれらはみな阿難・提婆達多の順に挙げており、調達を長子とする『十二遊経』と異なる。
- (5) また『起世経』、『起世因本経』は‘Mahānāman’に対応する名を欠き、かわりに「難提迦」が入った形になっている。
- (6) *The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Part I, p.199*。ただしここでは‘Bhadrika’とされる。

『衆許摩訶帝経』(大正 03 p.973 中)では王位を譲られる者の名は「賢徳」とされ、「婆捺哩賀」との間に訳語の不統一が見られる。

『根本有部律破僧事』は「時浄飯王見神変已。而苾芻多。不知何者是世尊。時王呼鄢陀夷。乃至擊鼓鳴搥。宣王教令。」(大正 24 p.144 中)の「乃至」の部分に大きな省略があり、これは『根本有部律』「使非親尼浣故衣学処第四之二」の「時浄飯王既見仏已……」(大正 23 pp.718 下)から「……時浄飯王即便槌鐘。」(大正 23 p.720 中)の記事によって補われる。そこに浄飯が「賢善」に王位を譲る記事が見られる(p.720 中)。

[3-2] 菩薩、難陀、提婆達多(調達)、阿難の誕生日と身長が以下のように記されている。

調達 4月7日生 身長1丈5尺4寸

菩薩 4月8日生 身長1丈6尺

難陀 4月9日生 身長1丈5尺4寸

阿難 4月10日生 身長1丈5尺3寸

釈迦族の者は1丈4尺、他の国の者は1丈3尺

釈迦族の500人の子などが菩薩と同日に生まれたとする伝承は多いが⁽¹⁾、調達(デーヴァダッタ)、難陀、阿難の誕生日が明記される伝承は他に見出せない。釈尊の誕生(出胎)日を『十二遊経』と同じく4月8日とするものには、白法祖訳『仏般泥洹経』、失訳『般泥洹経』、『修行本起経』、『異出菩薩本起経』、『太子瑞応本起経』、『仏所行讚』、『過去現在因果経』(宋元明版。高麗版は「2月8日」とする)がある⁽²⁾。

また釈尊の身長「丈六」⁽³⁾は別として他の身長の記述は類するものを見出せない。難陀については身長が釈尊より4指(angula)低かったという伝承がある⁽⁴⁾が、ここでは6寸低かったことになっている。

- (1) 『仏本行集経』(大正 03 p.692 上)、『過去現在因果経』(大正 03 p.626 上)、『衆許摩訶帝経』(大正 03 p.939 下)、『根本有部律破僧事』(大正 24 p.108 中)など。
- (2) 菩薩の誕生日については『モノグラフ』第1号【論文3】「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」pp.134~135 参照。

- (3) 釈尊の身長は諸文献で「丈六」とされるがパーリ語および梵語文献における対応する記述を見出せない。たとえば支謙訳『梵摩渝経』に「独尊之表軀体丈六。相有三十二」（大正 01 p.883 下）、「巨容丈六天姿紫金。相有三十二。好有八十章」（p.885 上）なる表現を見出すことができるが対応経典である MN.091 ‘Brahmāyu-s.’ (vol. II p.133) や『中阿含経』161「梵摩経」（大正 01 p.685 上）に対応部分を欠いている。『普曜経』に「巨身丈六相三十二」（大正 03 509 中）、「巨身丈六体紫金色」（p.532 中）、「相好身丈六」（p.534 上）、「巨身丈六相好嚴身」（p.536 上）、「王見仏巨身丈六相好光明体紫金色」（p.536 中）とあり、『方広大莊嚴経』にも「巨身丈六紫磨金色。三十二相八十種好」（大正 03 p.612 下）、「巨身丈六端嚴熾盛」、「父王觀仏巨身丈六紫磨金色」（大正 03 p.615 下）とあるが、*Lalitavistara* に対応箇所を欠くという具合である。

「1丈6尺」という長さは常人の身長として考えられない大きさであると思われるが、これには釈尊の身長が常人の2倍ないしは3倍であったという観念が背景にある。たとえば『長阿含経』に、これは毘婆尸菩薩についての記述であるが、32相の第17に「身長倍人」（大正 01 p.005 中）とある（ただし対応経典である DN.014 ‘Mahāpadāna-s.’ vol. II p.001 には対応する記述を欠く）。『薩婆多毘尼毘婆沙』には「云仏衣量。仏身丈六常人半之。衣量広長皆半也」（大正 23 p.561 上）とある。また *Samantapāsādikā* (*Vinaya* ‘Samghādhisesa 006’ vol. III p.144 の注釈部分) には「仏搦手は常人の3倍」（*sugatavidatthi nāma idāni majjhimassa purisassa tisso vidatthiyo* vol. III p.567）とある。平川彰『二百五十戒の研究II』春秋社 1993年 pp.300~303

- (4) 諸律の記述によると難陀は釈尊より身長が4指 (*āṅgula*) 低いだけであったため、諸比丘が難陀と釈尊を見間違えたとある。*Vinaya* ‘Pācittiya 092’ (vol. IV p.173)、『四分律』（大正 22 p.695 中）、『十誦律』（大正 23 p.130 中）、平川彰『二百五十戒の研究IV』春秋社 1995年 pp.342~353

[4] 菩薩の妻

[4-1] 菩薩の妃の人数とその名前については種々の伝承がある。簡単にまとめれば、南伝では正妃を複数数えるものではなく、‘Rāhulamātā’（ラーフラの母）のほか ‘Yasodharā’、‘Bhaddakaccā’ または ‘Bhaddakaccānā’、‘Bimbādevī’、‘Sumittā’ とされ⁽¹⁾、北伝では正妃を1人とする場合、‘Yaśodharā’（耶輸陀羅）とするものと ‘Gopā’ または ‘Gopī’（瞿夷、俱夷などの音写から推定される）とするものとの2つの系統がある。その出自に言及がある場合、‘Daṇḍapāṇi’ の娘とするものと ‘Mahānāman’ の娘とするものがある⁽²⁾。

(1) Malalasekera, *Dictionary of Pāli Proper Names*, PTS, 1937, ‘Rāhulamātā’ の項参照。

(2) 『モノグラフ』第3号 pp.053~054

[4-2] 菩薩の妻として『十二遊経』には「瞿夷 (Gopī)」、「耶惟檀 (Yaśodharā)」、「鹿野」の3人の名が挙げられている。瞿夷 (晋言明女) の両親は「水光長者」と「月女」、耶惟檀の父親は「移施長者」、鹿野の父親は「釈長者」とされ、耶惟檀と鹿野の母の名前については言及がない。羅云 (Rāhula) を産んだとされているのは耶惟檀である。

[4-3] 菩薩の妃について3名を一緒に挙げるものには、『根本有部律破僧事』とその梵本、『衆許摩訶帝経』、『修行本起経』、『仏本行集経』がある⁽¹⁾。ラーフラを生むのは『修行本起経』を除いてみなヤシヨーダラーである。

(1) 『根本有部律破僧事』（大正 24 pp.111 下~114 中）、*The Gilgit Manuscript of the Saṅghabhedavastu, Part I*, pp.062~078、『衆許摩訶帝経』（大正 03 pp.942 下~945

上)、『修行本起経』(大正03 p.465中~466上)、『仏本行集経』(大正03 pp.707上~715中)

[4-4] 『根本有部律破僧事』⁽¹⁾とその梵本、『衆許摩訶帝経』で3名は一致している。

Yaśodharā (耶輸陀羅) 釈迦族の‘Daṇḍapāṇi’ (執仗⁽²⁾)の娘

Gopikā (喬比迦、娑閉迦) 釈迦族の‘Ghāṭāgiri’ (鍾声聚落⁽³⁾、伽吒儼里)の娘

Mṛgajā (鹿王⁽⁴⁾、蜜里譏惹) 釈迦族の‘Kālakṣema’ (不過時、迦羅叉摩)の娘

これを『十二遊経』と比較して見れば‘Yaśodharā’が「耶惟檀」に、‘Gopikā’が「瞿夷」に、‘Mṛgajā’が「鹿野」に対応すると考えられる。ただし「瞿夷」に付された「晋言明女」という注と「鹿野」の「野」については問題が残る。また3人の妃の親については名前がまったく対応していない。

(1) なお『根本有部律』「使非親尼浣故衣学処第四之二」(大正23 p.720下)にも「耶輸陀羅。持称亦云具称 瞿比迦(密語也)密伽闍(鹿子也)」として3人の名が挙がっている。

(2) 『衆許摩訶帝経』には対応する訳語がない。

(3) 『根本有部律破僧事』では「時有釈迦女。名喬比迦。住鍾声聚落。」とあり、‘Ghāṭāgiri’を人名とはせずに「鍾声聚落」と地名に解している。

(4) 『根本有部律破僧事』の「鹿王」はおそらく「鹿生」の誤りである。

[4-5] 『修行本起経』では須波仏(Suprabuddha)の娘「裘夷」(Gopī)と結婚した後に「衆称味」(Yaśodharā)と「常楽意」の2人を娶る。

『仏本行集経』では第一宮の上首が釈種大臣・摩訶那摩の娘「耶輸陀羅」であり、第二宮の上首が「摩奴陀羅(隋言意持)」であり、第三宮の上首が釈種大臣・檀荼氏波尼(Daṇḍapāṇi)の娘「瞿多弥(Gotami)」であったとする。

『修行本起経』の「常楽意」と『仏本行集経』の「摩奴陀羅」から推定されるサンスクリット名は‘Manodharā’であり、同一の名であったと思われる。しかし「裘夷」と「瞿多弥」は一致せず、また妃の序列も異なる。

[4-6] 以上から『十二遊経』の菩薩の妃の伝承は『根本有部律破僧事』系統のものにもっとも近いことが分かる。差異を示すなら『根本有部律破僧事』系統がヤショーダラーを第一に置くのに対して『十二遊経』は「瞿夷」を第一にしている。

[5] 以上、『十二遊経』に見られる伝承記事について他の伝承の近いものを紹介した。釈迦族の起源、菩薩の家族および妻について有部律との類似が多いことが確認できる。